

---

# 無音の世界

秋原

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無音の世界

### 【Nコード】

N4567D

### 【作者名】

秋原

### 【あらすじ】

世界から消えた音。世界から音がなくなった五年後の日常を話そうと思います。

ない  
ない  
出ない  
出せない  
聞けない  
聞こえない

何がなくなったかという質問も、もう聞くことはできない。  
その質問に答える術も、文字しか残されていない。  
音がなくなった。まったくの、無音。

それは大きな大きな事件。  
いきなり世界中で音が出せなくなる。出なくなる。  
原因はわからない。大きな文字でそれがニュースに取り上げられた  
ときは絶望した。たぶん、それは世界中の誰もが同じだった。  
なのに事件があつてから少しもしないうちからお偉い学者達が宇宙  
の電波説や地球乗っ取り説なんかの馬鹿らしい仮説を真剣に文字で  
討論し合っているのだから人間ってタフだ。

そんな事件があつても時間は止まらない。もう、五年も経つてしま  
つたのが嘘のように思える。頭のよさそうな学者達が五年経つても  
まだ馬鹿みたいな仮説しか立てられていないのも嘘のようだ。  
この五年間で生まれた説は数え切れないほどだった。人間への神様  
の天罰、もっと大きな何かの予兆、地球の最後…様々な説が飛び交  
い、消えて、それからまた新しい説が生まれた。いくら繰り返した

って本当の答えには辿りつけなかった。いや、もしかしたら生まれ  
ては消えていった数多の説の中に一つぐらい確信をついたものがあ  
ったかもしれない。けれど、それは知りようのないことだ。そう考  
えると長年に渡って議論していること自体が馬鹿のように思えてな  
らない。

五年も経つと自然に無音にも慣れた。時間はかかったが、もう音を  
取り戻すことを諦めた、そういう人間からこの状況に慣れていった。  
暫く粘った記憶はあるが、この耳ももう何も聞こえないことに慣れ  
てしまった。もちろん、諦めない人間もいる。どこかでは音を取り  
戻すという怪しげな宗教なんかが戯言を言っつて金を巻き上げている  
らしい。

音というものはそれまでは改めて意識するものではなかったが、な  
くなってみるといままでの生活にどれだけ深く関わっていたかがわ  
かった。それから、音がなくなっつたことは思いもしなかったような  
様々な場面で問題になった。

世界には音が失われたことで意味をなさなくなったものもあつたが、  
それに代わつて文字を使つたものが増えていった。電話はなくなり、  
音楽はなくなり、文字が今まで以上に必要になり、視覚的娯楽を取  
り扱つたものが増えた。

もちろんこの五年の月日の中で生まれた子供も育つた子供もいるに  
関わらず子供達は無邪気に携帯用のパネルを突付き文字を使い会話  
をしている。そんな小さな子供が打ち込んでいると思うとパネルに  
浮き上がる文字も舌足らずに思えてしまうから不思議だ。まあ、こ  
の辺はただの先入観なのだけれども。正直、そんなことは無理だろ  
うと思つていたからこれがニュースで報じられた時は信じられなか  
つたものだ。その様子を目の前で見た時は初めて生命の神秘という  
ものを感じたけれど、今思うと少し違うな。

たまに、もしこの世界になくなつた時と同じように不意に音が戻つ  
たら、と考える。そして音がなくなつてから生まれた子供達は「あ」  
をなんて読んでいるかわかつたもんじゃない一人一人が好き勝手な

発音をしているのを想像すると自然とくすぐったい笑いが込み上げるのだがその後には子供達には音と言う概念すらないことに気づく。音がなくなってから、絶望するのはそんなときだ。音がなくなるまで知らなかった絶望が今はもう少し身近に感じられる。嫌な気分だ。子供達には、与えられていないのだ、知るはずがない。親も説明するだろうし、子供もそれを見て頷くだろう。だけれども、文字だけの説明でわかるものではないのだ。

テレビが音もなくつけられる。母親が内線でメッセージを送ってきたからだ。音がなくなつた今電話というものは意味をなくし代わりに生活の必需品とも言えるテレビに文字の似たような機能がついたのだ。音が消えても、テレビはしっかり生活の必需品として留まっている。見ていると暇つぶしになるし、音が消える前からテレビ画面には字幕が飛び交っていたから完全字幕でもあまり違和感がない。テレビは、視覚的娯楽に富んでいる。だから、テレビにそんな機能がついたのだろうけど。母親からの怒っているのかそれとも機嫌がいいのかわからない文字だけのメッセージを読む。文字だけでは冗談も冗談として通じないことを知っていたので音がなくなつてからはテレビ電話みたいなものが普及するかと思えばそんなことはなかった。何故だろうと考えてみると音があるからこそその電話であつて互いにパネルを打ち合う映像を見ているにも面白くないことに気がついた。それに、音があつた時も電話をするだけでいちいち身嗜みを気をつけなければいけないのは面倒などの理由であまり普及しなかったのだ。音が消えたとしても、その辺の理由は変わらないのだろう。

母親からのメッセージも読み終わっていつまでもその画面にしておくも馬鹿らしかったからチャンネルを変え、なにか面白そうな番組はやっていないかとさらに画面を変え続ける。そうするとアニメが目についた。このアニメの元になった漫画を持つていたから見てみようと思つたのだ。画面には漫画さながらにふきだしが飛び交っている。音がなくなつたことでアニメでしかでき

なかった漫画のコマからコマへと移動するモーションはほとんどなくなり今のアニメはただの動く漫画のようだ。それは、ふきだしを出すとそれを消すタイミングも必要になるからだろうな。それに、漫画とアニメの最大の違いだった音が失われてしまった為、漫画をわざわざアニメで見る意味も薄れてしまった気がする。もしかしたらアニメ存続の危機かもしれないと思ったが音を知らない子供はこれで楽しんでいるのだ。そういった子供はこれからもっと増えるだろうし、音を知っている者にとってはつまらないアニメはこれからも続くのだろうと思う。一度出したふきだしが消えて次のふきだしが出てくる画面を見つめながらため息をついた。この五年間で最も歳をとったと感じてしまうときは前のアニメの方が面白かったと思ってしまうことだ。つい、父親のそう言う声を思い出す。

そう、あと変わったと言えば、なんだろうな。

ああ、そうそう。ついに、というべきかついに、としか言い様がないのか、この前分厚い辞書から音という項目が消えた。音が消えてからその項目は需要のないものになってしまったらしい。需要のないものを辞書に載せていても仕方がないのだろう。そもそも、辞書から消えたからって音が戻ってくる可能性が消えたわけじゃない。けれどそれに対する人々の反応はその可能性を失ったかのようなのだ。人とはそういった意味もない最後の砦の意味もなく持っているものなんだろう。

それも知らずに無邪気に笑っている音を知らない子供達。

これでこれから先、もし音が戻ってきたとしても音の存在証明がまた一つ消えてしまったことになる。

これから先すべての音の存在証明が存在価値が消えるのはそう遠くないことだろう。

(後書き)

終わりの部分をまたいつかというものから修正させていただきました。

ウルトラマンなどの単語が広辞苑に追加されるというニュースを思い出し、必要のなくなった単語は消えるのではないのだろうかと思つて書いてみました。まあ広辞苑には一度登録した単語は削除しないという方針があるそうですが…

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

平成二十年四月六日 秋原

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4567d/>

---

無音の世界

2011年1月4日02時46分発行